



進化するデザインマンホールと 周辺環境

大槻 弥生

近年、マンホールの蓋が注目を集め始めている。

昭和60年代ごろから、デザイン性に富んだ蓋は多々存在していたがそれが最近注目を集め始めている。

それに伴う形で、蓋は様々な変化を遂げており、景観と調和するだけでなく、広告としての機能を有する物・観光ガイドの役割・市町村のアピールなど地方自治体を盛り上げるのにも一役買っているようだ。

本稿ではデザインの歴史を振り返りながら、近年多く見られるようになった観光客誘致の可能性を秘めた蓋まで、様々な蓋を紹介する。

キーワード：マンホール、景観

1. はじめに

近年、マンホールの蓋が話題になっている。

見た目は鋳物の丸い蓋で、大きさも殆どの場合60 cm、至って地味な存在。

では、何が話題なのか？

一番大きな理由はそのデザイン性ではないかと筆者は考える。

一口に60 cmの蓋と言っても、よく見ると実に様々なデザインが施してあるのがわかる。

それも市町村毎に、場合によっては地域毎に、そのデザインは全く違うものに仕上がっている。

これが最大の魅力なのだろう。

この魅力に取りつかれ、筆者は16年程前から全国を回り蓋の写真を撮影するのを趣味にしている。

本稿ではその写真を中心に、蓋の歴史とその進化を追っていききたい。

2. はじまりは…

デザインが普及した切っ掛けは、昭和60年に遡る。

当時の下水道に対する一般のイメージは最悪で、生活に欠かせないインフラ設備であるにもかかわらず、下水道関係者に対する世間の風当たりはかなり冷たかったと聞いている。

その為、当時の建設省都市局下水道課の専門官が、下水道のイメージアップを図るべくマンホール蓋のデザインの多様化を提唱、それがデザイン普及の契機と

なった。

当時の人口普及率は34%、指定都市でこそ78%と比較的高い数字ではあったものの、その他の一般都市では32%、市町村に於いては僅か3%だったという。

「下水を普及させる為にも、まずは下水道に親しみを持ってもらいたい」

その為に、下水道設備の中で唯一目に見える蓋にデザインを施そうというのが基本の考えだったようである。

当時の蓋を振り返ってみると、

- ・ JIS規格に沿って作成された蓋で真ん中に市章や団体のマーク（これはメトロ）が入った物（写真—1）
- ・ 鋳物メーカーの規格蓋（写真—2）
- ・ JISの規格をベースに作られたと思われる蓋で北海道を中心に使用されている物（写真—3）
- ・ 少し時代を遡って明治末期から大正時代の蓋（写真—4）

どれも当時良く見られた蓋だが、確かに面白みに欠けていて見栄えのしない蓋のように思える。

3. 熱意の甲斐あって…

下水道への悪いイメージを払拭したい、というのは下水道関係者は皆同じ思いだったのだろう。

この提案は徐々に市町村で採用され始める。

翌年の昭和61年には『下水道マンホール蓋デザイン20選』を選出、これがこの働きかけを後押しする形となったのか、平成5年に『グラウンドマンホール

デザイン 250 選』を選出するまでになった。

この 250 選を選出する際に、全国 1123 事業者から 1090 件のデザインが寄せられたという。

当時の市町村数は 3300 弱、実に 1/3 の事業者が何らかのデザインを施した蓋を敷設していたことになる。

当時敷設された蓋を 20 選・250 選の中からいくつか紹介してみたいと思う。

- ・千葉県松戸市の蓋 (20 選) モチーフは市の木ユーカリとコアラ (写真—5)

なぜ市の木がユーカリなのかというと、松戸市はオーストラリアのビクトリア州ホワイトホース市と姉妹都市提携を結び、ユーカリが市の木に指定されたのだという。

- ・太宰府市の蓋 (20 選) モチーフは市の花でもある天満宮の梅 (写真—6)
- ・福井市の蓋 (250 選) モチーフは福井市のシンボ

ルであるフェニックス (写真—7)

戦災・震災など、度重なる災禍にもめげず、再び三たび立ち上がった福井市民の努力を表しているそう。

- ・明石市の蓋 (250 選) 天文科学館 (写真—8)
- ・松本市の蓋 (250 選) てまり (写真—9)

もともと松本市は女の子の蓋 (写真—10) を敷設したのだが、踏んでは可哀そうだと市民から苦情が寄せられたため、てまりに変更になったという話が残っている。

苦情が寄せられるほど市民に興味を持ってもらえたと考えれば、蓋にデザインを施すという考えは成功だったと言えよう。

ちなみに、現存している少女の蓋はこの写真のもの 1 枚のみ。

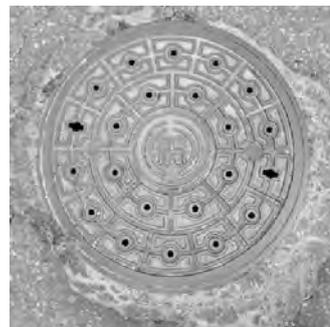
今から 30 年以上昔から、このような緻密な細工を施した蓋が多数存在するのは驚きである。



写真—1 JIS 規格型



写真—2 メーカー規格型



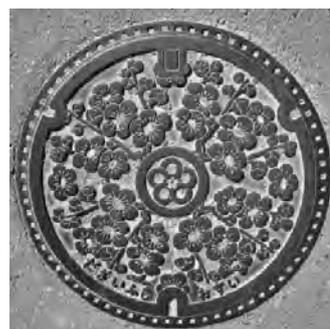
写真—3 札幌市型



写真—4 帝国大学



写真—5 コアラ (松戸市)



写真—6 梅 (太宰府市)



写真—7 フェニックス (福井市)



写真—8 天文科学館 (明石市)



写真—9 松本てまり (松本市)

また、蓋の柄を眺めているとその市町村の歴史も垣間見えるのがとても面白い。

関心が高まった効果なのか、普及率も1993年末時点において全国49%となり15%の増加がみられた。

4. 景観に溶け込む蓋とアピールする蓋

下水道の普及が進むとともに、景観との調和を考えられた蓋も見られ始める。

これらの蓋は化粧タイルなどが施された歩道などでよく見られ、歩道の化粧タイルに合わせたタイルが貼られている物(写真-11)が多い。

他にも周りの歩道に合わせた色に統一された物や(写真-12)、近辺で採取できる五色石を埋め込んだもの(写真-13)など、独自性を持たせつつ、周囲の景観に合わせた蓋も見られるようになった。

少し珍しい物では、化粧タイルだけでなく真ん中に市の花をデザインした物が描かれている(写真-14)。

このタイプの蓋はあまり目にしたことは無いが、写真-11のような蓋は今でも、商店街や駅前など化粧タイルの歩道などにはよく見られる蓋である。

調和を重視した蓋が存在する反面、アピール性の強い蓋も増えてきた。

一口にアピール性の強い蓋と言っても、周囲の雰囲気に合わせて作られた物であれば景観に溶け込んでいると考えても良いのではないかと考える。

写真-15～18は全国にあるスポーツ施設周辺に敷設されている蓋である。

これらの蓋は、球団やチームのマスコットキャラクターを使う事で、これから試合観戦に出かける人々の気持ちを盛り上げてくれる効果があるだろう。

中でも、写真-17の蓋には一つ細工がある。



写真-10 手毬で遊ぶ幼女(松本市)



写真-11 化粧タイル(沼津市)



写真-12 セラミック加工(福部村)



写真-13 五色石(高知市)



写真-14 化粧タイル(藤沢市)



写真-15 カープ坊や(Mazdaスタジアム)



写真-16 サンチェ(エディオンスタジアム)



写真-17 マリノス君(日産スタジアム)



写真-18 マリノス君(日産スタジアム)

現在、スタジアム近辺に50枚以上敷設されているがこの中に1枚だけウイंकをしている蓋がある(写真一18)。他にも記念に敷設されたい蓋もあるので、宝探しのように探してみるのも面白いのではないかと思う。

5. 特色を色濃くアピールする蓋たち

(1) 街のアピール

4. で取り上げた特定の施設のみならず、観光地をアピールする蓋も増えている。

写真一19, 20は観光客に人気の通りをモチーフにしたもので、街並みや観光地の雰囲気が感じ取れ、アピールツールとしての役割を十分に果たしている。

他にも、アニメや漫画のキャラクターをデザインした蓋もいくつかみられる(写真一21, 22)。

作者の出身地であったり、ゆかりの地であったりする事が起用の理由である事が多い。

また、作者の記念館などもある場合も多く、蓋にそれらのキャラクターをデザインする事で、町の雰囲気作りに一役買っているとえよう。

(2) 特産物をアピール

市町村の特産物をモチーフにした例は多数みられる。

農産物であったり、水産物であったり、民芸品であったり、こちらもバラエティに富んだデザインが多数存

在している(写真一23, 24)。

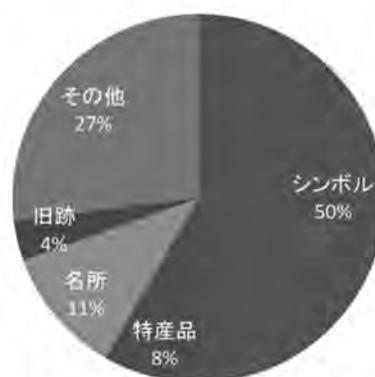
景観的に寄与している部分は少ないかもしれないが、市町村をアピールする点では有効なツールと言えるだろう。

(3) 市町村のシンボルをデザイン

もっとも多いデザインは市町村シンボル(市の花・鳥・木など自治体毎に定められたもので大抵の自治体に存在する)で、様々なデザインがある中でも群を抜いて数が多いように思える。

手持ちの写真で統計を取ってみても一目瞭然である(図一1)。

デザインの傾向



現在確認済の930市町村での割合

図一1 デザインの傾向



写真一19 一番街と時の鐘(川越市)



写真一20 酒蔵通り(東広島市)



写真一21 ゲゲゲの鬼太郎(堺港市)



写真一22 アンパンマン(香北町)



写真一23 輪島塗(輪島市)



写真一24 りんごの花と実(長野市)

例えば、同じ花がモチーフでも市町村毎にデザインに違いがあり、比較してみるととても面白い。

ここでは、市町村のシンボルとしてよく使われるアジサイを比較してみた（写真—25～28）。

同じアジサイをモチーフにした蓋でも、市町村によってデザインが様々なのがひと目見てわかる。

写真—25が梅の花との組み合わせになっているのは、アジサイは町の花ではなく町の木という扱いなので、町の花である梅と組み合わせたデザインになっている。

個人的には逆では？と思わなくもないが、こういった定義も市町村によって違いがあるので面白い。

(4) 富士山

世界遺産にも認定された富士山は様々な市町村で図案化されている（写真—29～32）。

個人的に面白いと思ったのは写真—30の茨城県牛

堀町（現潮来市）の蓋。

富士山から大分遠いのになぜだろうと疑問に思って調べてみたら、葛飾北斎の富嶽三十六景をそのままデザインとして使用した蓋だと言う。

遠く離れた茨城でも富士山が見える事、葛飾北斎の世界が蓋に描かれている事、二重に驚きの蓋だった。

写真—32は下水ではなく消火栓の蓋。

下水だけでなく消火栓もバラエティーに富んだものが増えているようだ。

6. 更に進化を遂げる

近年、鋳物による凹凸でデザインを施す手法が主流であった蓋のデザインに新たなタイプが出始めている。

はめ込み式のパネルを利用した物や、プリントシールを利用した物である（写真—33, 34）。



写真—25 豊浦町 アジサイと梅



写真—26 田上町 椿寿荘とアジサイ



写真—27 余呉町 アジサイ



写真—28 長崎市 アジサイ



写真—29 焼津市 カツオと白波と富士山



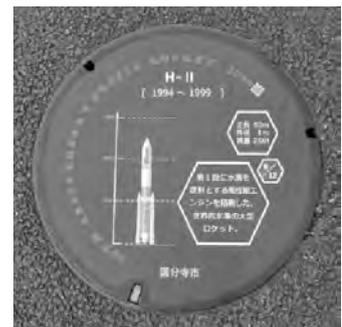
写真—30 牛堀町 富嶽三十六景



写真—31 河口湖町 河口湖大橋と富士山



写真—32 富士市 かぐや姫と富士山



写真—33 国分寺市 H-IIロケット



写真—34 高松市 高松城と那須与一



写真—35 仙台市 空条 承太郎



写真—36 仙台市 東方 仗助

これらは、印刷により作成されるため1枚から作成が可能で、より繊細な表現が可能になった。

この手法を使った蓋をイベントで利用している自治体も出てきている。

昨年8月仙台市で期間限定の蓋が設置された（写真—35, 36）。

これは、仙台市内で行われていた展示の期間に合わせて設置されたもので、今は撤去され見る事が出来なくなっている。

私が見に行った当日は、雨にもかかわらず下を向いて撮影している人達をちらほら確認することが出来た。

そう考えると、蓋のデザインである程度の集客が見込めると言っても過言ではないだろう。

7. おわりに

最近注目されている影響なのか、既にデザイン蓋が敷設済みの市町村で新しいものが敷設される動きも出ている。

他にも先に述べたとおり、イベントや観光地などと組み合わせた蓋も見られるようになってきた。

個人的には鋳物のデザイン蓋が好きなので、イベントでよく使われるパネル嵌め込み型にはそれほど魅力は感じないのだが、幅広く認知してもらうためには良い手段なんだと感じている。

JICMA

【筆者紹介】
大槻 弥生（おおつき やよい）
（株）奥村組
土木技術部 技術2課

